

山田原欽 「性空上人碑」 訳注稿

独立行政法人国立高等専門学校機構 徳山工業高等専門学校

一般科目 准教授 谷本圭司

Translation and annotation (draft) of Genkin, Yamada (山田原欽) “Shoukuu-syounin hi (性空上人碑)”

Keiji, TANIMOTO

〔解説〕

「性空上人碑」は、周防室積（現在の光市室積）の峨眉山普賢寺の開祖である性空上人の墓碑文であり、で、江戸時代初期の萩藩（長州藩）の秀才とうたわれた山田原欽が二一歳の時に書いた漢文の文章である。一般に、近世に書かれた寺社の由来に関係する文章は、史実に全くそぐわない妄想による牽強附会の記述が多く、その史料価値は著しく低いという見解が常識であり、この「性空上人碑」も、没年の記載にその例を見ることができるといえる。

しかしながら、当時、長州藩きつての秀才の評も高く、朝鮮通信使との漢詩の応酬でその名を知られた文学の徒、表現者としての山田原欽の創作の一端を今に伝えていることには疑いはなく、原欽の平易にして達意の表現を知るには、格好の作品である。

また、山田原欽の漢詩文は、管見の及ぶ限りにおいて、現代語訳の試みがなされていないため、現代において、その名を知る者はいても、作品そのものを読むことには困難さが伴っていることは事実である。このたび、本校機械電気工学科の藤本浩先生より要請をいただいたのを機に、本校の四年次選択科目の講義用参考資料としての利用をも意図して、才の不足を省みず、訳注を試みることにした。地域に対する貢献という意味でも、ささやかな意味はあると考えている。

〔訳注について〕

本文は、一般に目にするのがたやすく、活字に翻刻されている『防長寺社由来』（全七巻 山口県文書館 昭和五七年）第二巻 熊毛宰判所収の「室積村 普賢寺 普賢寺由来記」によることにした。本文の内容にそつて大まかに段落分けを行ったが、これは筆者の考えによるものであり、あくまでも理解に資するためである。また、普賢寺の榊野省堂（住職から山田原欽直筆の原文を観覧する機会を与えられたが、時間的な制約もあり、詳しい検討は行っていない。これについては詳細な校勘も含め、別の機会に何らかの形で公にすることができればと思っている。

通釈については、徳山高専の学生（四年生）を対象に、努めて平易な心がけて作成した。講義用の資料としての配慮ではなく、彼らにとつて理解しやすい文となつていけば、一般の方々にも十分に理解できるレベルの文章になるであろうと考えてのことである。しかし、安易な説明に傾きすぎたきらいもあり、また文章としてのリズムが崩れ、原文の格調を損ねた部分もないとは言えない。諸賢のご教示をいただければ、幸いに思う。

注については、典拠のある場合、あるいは、仏教関係の文献に関連する語については、管見の及ぶ限りにおいて原文を挙げた。引用原文に訓読文を加えて理解をたすけるべきではないかとも考えたが、体裁を「普賢縁起」にそろえるために割愛した。また、それ以外の語についても、平易を旨として煩雑にわたることを避けたために語意を記すにとどめたものも多い。

【本文】

性空上人碑

上人性橋氏、性空其諱也。父善根中大夫、母源氏、平安城人也。上人生、便喜静坐、面有微笑相、恶言不出于口、十歳能誦法華。長為僧、結浄慮於日之霧島、開名利於幡之書写。終觀普賢菩薩之真容於此浦、尋

寛弘三年三月十三日寂。年八十、葬於此。

上人所止之処、緇素成市其事跡垂於汗簡者尚矣。不復措辞焉。蓋上人
之神如水、上人死如婦。若不宜有所留、然而如有眷々于室積者何也。室
積者普賢示現之処、上人成果之墜、上人可謂死得其所也。

其後多歴年、風月所損墓誌荒磨。維我大君大江吉就公臨邦之日、思上
人芳事、鼎建石於墓上、存遺址云、若夫峴山深澗之事、則功名之迹、而
非所希於上人也。

峨山如蠟、象海如綸。

石兮有朽、道風不泯。

貞享三年 丙寅 十二月日

復軒山田原欽熙 撰

【訓読文】

性空上人碑

上人 姓は橘氏、性空は其の諱なり。父は善根大申大夫、母は源氏、平
安城の人なり。上人生れて、便ち静坐を喜び、面に微笑の相有り、悪言
は口を出でず。十歳にして能く法華を誦す。長じて僧と為り、浄廬を日
の霧島に結び、名利を幡の書写に開く。終に普賢菩薩の真容を此の浦に
覩て、尋いで寛弘三年三月十三日に寂す。年八十、此に葬る。

上人 所止の処は、緇素 市を成し、其の事跡の汗簡に垂るる者(こと)
尚(ひさ)しければ、復た辞を措かず。蓋し上人の神は水のごとく、上
人の死は帰るがごとからん。若(も)し宜しく留まる所に有らずんば、
然り而うして室積に眷々たる者(こと) 有るが如きは何ぞや。室積は普
賢示現の処、上人 成果の墜にして、上人 死するに其の所を得たると謂
うべきなり。

其の後 多く年を歴、風月の損する所の墓誌は荒磨す。維に我が大君大
江吉就公 臨邦の日に、上人の芳事を思い、石を墓上に鼎建し、遺址を存
して云う、「夫の峴山深澗の事のごときは、則ち功名の迹にして、上人
に希う所に非ざるなり」と。

峨山は蠟の如く、象海は綸の如し。

石や 朽ちること有るとも、道風は泯(ほろ)びざらん。

貞享三年 丙寅 十二月日

復軒山田原欽熙 撰す

【通釈】

性空上人碑

性空上人は、姓は橘氏であり、性空はその生前の名である。父は大申
大夫 橘善根、母は源氏で、平安京の出身である。上人は生まれると、そ
のまま落ち着いてきちんと座っていることを好み、その表情は微笑を浮
かべていて、人を悪しげまに言うことはなかった。十歳で法華経を誦
することができ、成長して僧となつてからは、清浄な廬を日向の国の霧
島山に結び、由緒ある寺を播磨の国の書写山に開いた。終りに普賢菩薩
の真の姿を此の「室積の」浦で拝見し、次いで寛弘三(一〇〇六)年三
月十三日に示寂なされ、年齢は八十歳、ここに葬られたのである。

上人が住まいとした所は、道俗の者たちが「大勢来て」市が立つたか
のようであつた。上人の事跡は記録に残されて久しいので、さらに言葉
を選び語ることはいらないで。思うに、上人の精神は水のように「最
上の善」であり、上人は死を家に帰るかのように「に感じて少しも恐れな
い人」であつたのだろう。「さて、この地が」もし「上人の」留まるべ
き所でないならば、そのようにして室積に心ひかれることがあつたのは
どうしてだろうか。室積は普賢菩薩の示現の地であり、上人の成し遂げ
た結果の落着する所であつて、上人は死ぬにあたってふさわしい場所を
得たと言ふべきなのである。

その「上人が亡くなった」後、多くの年月が経ち、風雨歲月が損傷さ
せた墓石は荒廢し摩滅していた。「さて、」ここに我が主君である大江
氏の末裔毛利吉就公は、お国入りの日に、上人のすぐれた事跡に思いを
はせ、石を上人の墓の上に建てて、上人の遺跡を保存して言われた、「世
に言う」峴山深澗のこのようなのは、功名の事跡であつて、「功名

心に無縁の」性空上人に希い求めることではない」と。

峨眉の山は研ぎすまされたかのように高く、象鼻〔ヶ岬〕の海は青い絹糸の帯紐のようである。

たとえこの石が摩滅してしまうことがあるとも、「性空上人の」徳と志が減びることはないであろう。

貞享三（一六八六）年 丙寅 十二月吉日 復軒山田原欽熙 記述す。

【注】

○性空上人

性空上人の伝記資料は、

①鎮源 撰『本朝法華驗記』巻中「第四十五 播州書寫山性空上人」（『續群書類従』巻一九四 第八輯上 所収、『日本思想体系』第七巻所収）長久年間（一〇四〇〜一〇四四）の成立

②承澄 撰『明匠略傳』日本 下「性空上人」（『群書類従』巻六八 第五輯 所収）建治元（一二七五）年の成立

以上の二つが基本である（以下それぞれの引用箇所は『本朝法華驗記』、『明匠略傳』とのみ記して引用する。）。なお、他に、書写山円教寺関係に伝わるものがあり、それらは資料としては第一級であるが、ここでは山田原欽が比較的容易に目にするのが可能であった資料を原則とすべきと考え、あえて読解の基本資料として用いないことにした。

○上人姓橘氏

『本朝法華驗記』、『明匠略傳』ともに「俗姓橘氏」とする。

○諱

ここでは、生前の名のこと。なお、性空上人の俗名は、「善行」である。

○父善根大中大夫

『明匠略傳』に「其父従五位下橘朝臣善根名詮」とある。「大夫」は、律令制において、特に五位の通称。

○母源氏

『明匠略傳』に「其母源氏」とある。

○平安城人也

『本朝法華驗記』には「平安宮西京人也」とあり、『明匠略傳』には「左京人也」とある。

○静坐

心を落ち着かせ、姿勢を正して静かに座ること。『韓非子』十過に「師涓曰、諾。因静坐、撫琴而寫之」とある。

○面有微笑相、悪言不出于口

『本朝法華驗記』に「從幼少日、至于老滅、面含微笑、顔色慈悲、口吐冥言、永離僞言冥言（「冥」、読みはジ。柔らかいこと。「冥言」は、柔らかく優しい言葉のこと）を吐き、永く僞言（「僞」、読みはソ。麤）に同じ。粗いこと。荒々しいこと。「僞言」は、粗暴な言葉のこと」とある。

○十歳能誦法華

『本朝法華驗記』には「受持一乘、偏期佛惠」とあり、『明匠略傳』には、「雖受女身既等佛心、十歳始就師、受『法花経』八巻」とある。

○長為僧、結浄廬於日之霧島

『本朝法華驗記』には、「尋練行昔、人跡不通、鳥音不聞、深山幽谷、結廬而住」とあり、『明匠略傳』には、「至廿六、拜親剃頭、篋居霧嶋、讀誦法華、精勤修習、晝夜不怠。巖室幽寂、四隣無人」とある。

○開名利於幡之書写

『明匠略傳』に「播州化人來諭云、山名書寫、鷲頭兮上峯、号一乘鷄足送雲。蹈此山者發菩提心、攀此峯者浄六情根。上人西洞結庵、坐禅澄神、以薦為帷幕、呂紙為衣裳」とある。

○觀普賢菩薩之真容於此浦

「觀」は、まのあたりにする。「真容」は、真実の姿。「此浦」は、室積浦を指す。性空上人が、普賢菩薩を目の当たりにしたことを、『本

朝法華驗記』、『明匠略傳』ともに記していない。ことは『古事談』第三僧行、『十訓抄』巻三、『撰集抄』巻六などに見えるが、各々異同がある。なお、山田原欽が「性空上人碑」を書く三ヶ月ほど前に書いた「普賢縁起」には、性空上人が普賢菩薩に会った事を詳しく記している。

○尋寛弘三年三月十三日寂。年八十

『明匠略傳』に「寛弘四年三月十日未時、遂結定印、向西座禪、安禪昇霞。歳八十」とある。

「未時」は、現在の午後二時ごろ。「定印」は、入定の印契（いんげ）。「安禪」は「入定」のことであるが、ここは精神集中の状態に入る意味ではなく、死の婉曲表現であろうから、「意識を失う」ほどの意ととるべきである。「昇霞」は、人の死をいう。『劉子新論』風俗に「秦之西有義渠之國、其人死則聚柴而焚之、煙上燻天、謂之昇霞」と見える。」

この『明匠略傳』の性空上人の死没年月日は、山田原欽の記載とはほぼ一年のずれがある。原欽は、「普賢縁起」にも「寛弘三年」と記しているところから、おそらくは何かの資料に基づくのであろう。『防長寺社由来』の「峨帽山普賢寺由来記」（第二巻一九八頁下）には「一、当寺は寛弘三年の建立、峨帽山普賢寺と申候。普賢示現の霊場也。開基性空上人同四年三月十三日寂ス。齡八十二して」とあり、『防長風土注進案』熊毛郡室積村風土記 寺院 禪宗峨帽山普賢寺 同境内の項に「碑銘 山田復軒〔傍記、原欽〕先生撰述 寺傳、開基性空上人寛弘四年三月十三日寂、葬於此」とあって、いずれも性空上人の寂した年を寛弘四年としている。ここに山田原欽が貞享三（一六八六）年に書いた「縁起」中に「寛弘三年」と記するのは、おそらく寺伝によるものと考えられ、もともとの寺伝が「寛弘三年」であったのに基づいたと考えるべきであろう。その後、寛保元（一七四一）年の『防長寺社由来』「峨帽山普賢寺由来記」、天保年間（一八三〇～一八四四）の『防長風土注進案』「熊毛郡室積村風土記」において、他書に記すところによって修正

が図られたと推測される。

○葬於此

『防長風土注進案』熊毛郡室積村風土記 寺院 禪宗峨帽山普賢寺 同境内の項に「碑銘 山田復軒〔傍記、原欽〕先生撰述 寺傳、開基性空上人寛弘四年三月十三日寂、葬於此」とある。

岩田茂樹「圓教寺奥院開山堂の性空上人坐像について」（『鹿園雜集』奈良国立博物館紀要 第一一〇号 三五～四七ページ 平成二一年三月）には、書写山円教寺の開山堂の本尊である木造性空坐像がX線撮影され、性空上人の遺骨を納めた瑠璃壺が内蔵されていることが明らかとなったことが詳細に報告されていることから考えるに、性空上人が室積に葬られたというこの記述は、事実ではないと思う。

○所止

居住する。『詩経』商頌「玄鳥」に「邦畿千里、維民所止」とある。

○緇素成市

「緇」は黒衣、「素」は白衣。「緇素」とは、僧侶（出家）と俗人（在家）をいう。『本朝法華驗記』に「道俗作市、貴賤雲集」とある。

○垂

後世に伝える。『荀子』王霸篇に「垂名乎後世」とあり、また、『後漢書』巻一六 鄧禹伝に「但願明公威德加於四海、禹得効其尺寸、垂功名於竹帛耳」とある。

○汗簡

文書。書籍。『晋書』巻七五 王湛伝に「史臣曰、……、雖崇勳懋績有闕於旂常、素德清規足傳於汗簡矣（「崇勳」は尊ぶべき勲功。「懋績」は、盛大な功績。「旂常」は、王侯の旗さし物。「闕」は、欠ける。「素德」は、清廉潔白の美德。「清規」は、守るべき規範）」とある。

○措辞

会話や詩文のことば遣い（を選ぶ）。『逸周書』官人篇に「自順而不讓、措辭而不遂、此隱於智理者也」とある。

○神

魂。精神。『禮記』樂記に「明則有禮樂、幽則有鬼神」とあり、鄭玄の注に「聖人之精氣謂之神」とある。

○如水

万物を利用して争うことのない最上の善のようであること。『老子』第八章に「上善如水。水善利萬物而不争、處衆人之所惡。故幾於道矣」とある。

○如帰

死に対して、もともと帰るべき所と思つて、少しもおそれないこと。

『大戴禮記』曾子制言上に「及其不可避也、君子視死如歸」とある。

○眷々

恋いこがれるさま。思い慕うさま。睠睠。『詩經』小雅「小明」に「念彼共人、睠睠懷顧」とある。

○室積

現在の山口県光市室積。

○室積者普賢示現之処

「普賢」は、普賢菩薩。「示現」は、仏菩薩が種々の姿に身を変えてこの世に現れること。この部分については、前の「觀普賢菩薩之真容於此浦」の注、および山田原欽の書いた「普賢縁起」を参照されたい。

○成果之墜

「成果」は、できあがった結果。成し遂げた結果。「墜」は、落下するの意であるが、ここでは、「落着する」と解釈するほうが文意に沿うと考える。

○死得其所也

『春秋左氏伝』文公二年に「（狼）暉曰、吾未獲死所（暉曰く、吾れ未だ獲が死ぬ所を獲ず、と）。」とあり、後に「死得其所」が死ぬことに意義を見出すことの意で用いられるようになった。王僧達の「求徐州啓」に「臣感先聖格言、思在必效之地、使生獲其志、死得其所」（『宋

書』卷七五 王僧達伝所収）とある。『北史』卷四六 張普恵伝にも「人生有死。死得其所、夫復何恨。」とある（『魏書』卷七八 張普恵伝も同じ）。

○風月

ここでは、風雨歲月の意。

○墓誌

死者の出自や経歴を記した散文を金属板や石板に刻んだもの。通常は死者とともに墓に埋める。ここでは、墓の外に建てる墓碑の意味で用いられている。天保年間（一八三〇～一八四四）の『防長風土注進案』熊毛郡室積村風土記 寺院 禅宗峨嵋山普賢寺 同境内の項に「性空上人墓 但、五輪石塔」とある（『防長風土注進案』のこの部分には、本文とは異なる筆跡で、「元亨釈書ニ室積ノ事ヲ載セス然シテ伝来ニ異迹甚多不遑備載」とある）。

○荒磨

荒廃し磨耗する。

○大君

君主の尊称。ここでは、主君の意。

○大江吉就公

長門萩藩主毛利吉就。毛利氏は、大江匡房を祖としているので、大江氏を名乗る。

毛利吉就（もうり よしなり 寛文八（一六六八）年～元禄七（一六九四）年）は、長州藩の第三代藩主。第二代藩主・毛利綱広の長男である。天和二（一六八二）年に、父の隠居により第三代藩主となった。（以上は、『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』の解説による）

○臨邦

入封。お国入りのこと。「国入り」とは、大名が自分の領地に行くこと。毛利吉就は、天和二年（一六八二年）二月二十七日、父の隠居により跡を継いでおり、初めてのお国入りは貞享元（一六八四）年である。（安

藤紀一編『山田原欽』（明倫同窓会事務所 昭和十五年刊 国会図書館デジタルコレクションにて公開のもの <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1075070>）による。]

○芳事

「芳跡」に同じ。先賢のすぐれた事跡のこと。

○鼎建石於墓上

「鼎建」は、宮建に同じ。造営すること。「鼎」の字から推しはかるに、三方を石で囲むようにして、上に石板を置いたのかもしれない。

○岷山深澗之事

「岷山深澗」は、晋の杜預（字は元凱）は、後世に名を残すことを好み、常々「高い岸が谷となり、深い谷（＝深澗）も丘となる（『詩経』小雅「十月之交」の一節で、世の変転の激しいことをいう）」と言っていたが、自身の勲功を刻んだ石碑を二つ作り、一つを万山の下に沈め、いま一つを岷山の上に立てて、「この後、谷が丘に、丘が谷にならないとどうしてわかるるか」と言ったという故事による。『蒙求』巻中「元凱傳癖」に「初預好爲後世名、常言、高岸爲谷、深谷爲陵。刻石爲二碑、紀其勲績、一沈萬山之下、一立岷山之上、曰焉知此後不爲陵谷乎とある。」「『晋書』卷三四杜預伝にも同じ記載がある。」

○則功名之迹、而非所希於上人也

杜預の故事が、杜預自身の功名を残す意図があったのとは異なり、性空上人にはそのような意図が全くなかったことをいう。

○峨山

現在の山口県光市室積の峨眉山。普賢寺の山号でもある。

○蠣

蠣、礪に同じ。研ぐ、磨くの意。

○象海

山口県光市室積 象鼻ヶ崎の海。室積浦（当時の地名は御手洗）をいう。

○綸

青い絹糸で組んだ佩びひも。

○朽

摩滅する。消滅する。

○道風

道徳風操。

○泯

滅ぶ。滅びる。滅亡する。

○貞享三年

西暦一六八六年。この年、山田原欽は、数え年の二一歳である。

○十二月日

十二月吉日の意。

○復軒山田原欽熙

山田原欽（やまだ げんきん 寛文六（一六六六）年～元禄六（一六九三）年）江戸時代前期の儒者。宇都宮遯庵、伊藤坦庵に学んだ。長門萩藩主毛利吉就に世子時代から仕える。東光寺建立の件で吉就に諫言したがいれられず、元禄六年七月一日自刃した。享年、二八歳。名は頼熙。号は復軒（以上は、『デジタル版 日本人名大辞典』の解説による）。

なお、『山田原欽先生事蹟』（村田峯次郎編 明治三三年刊）に収録の、伊藤坦庵の「復軒説」に「山田生熙、字原欽、號復軒」とあり、また同書収録の小倉尚齋の「山田原欽先生行状」に「先生、源姓、山田氏。熙其名、原欽其字。號復軒」とあって、名を「熙」としている。

○撰（のべル。のべ）。

撰に同じ。記述する。著述する。

【謝辞】

今回の訳注にあたっては、徳山工業高等専門学校機械電気工学科の藤

本浩先生が機会を与えて下さり、普賢寺のご住職梶野省堂氏にご協力いただきよう労を取ってくださいました。普賢寺のご住職梶野省堂氏には、貴重な資料を提供いただき、その公開を許可してくださいました。また、機械電気工学科の三浦靖一郎先生からは、再三にわたり、地域貢献の観点から有意義であることを説いていただき大いに励まされた。藤本先生、梶野住職、三浦先生にあらためて感謝の意を表しておきたい。

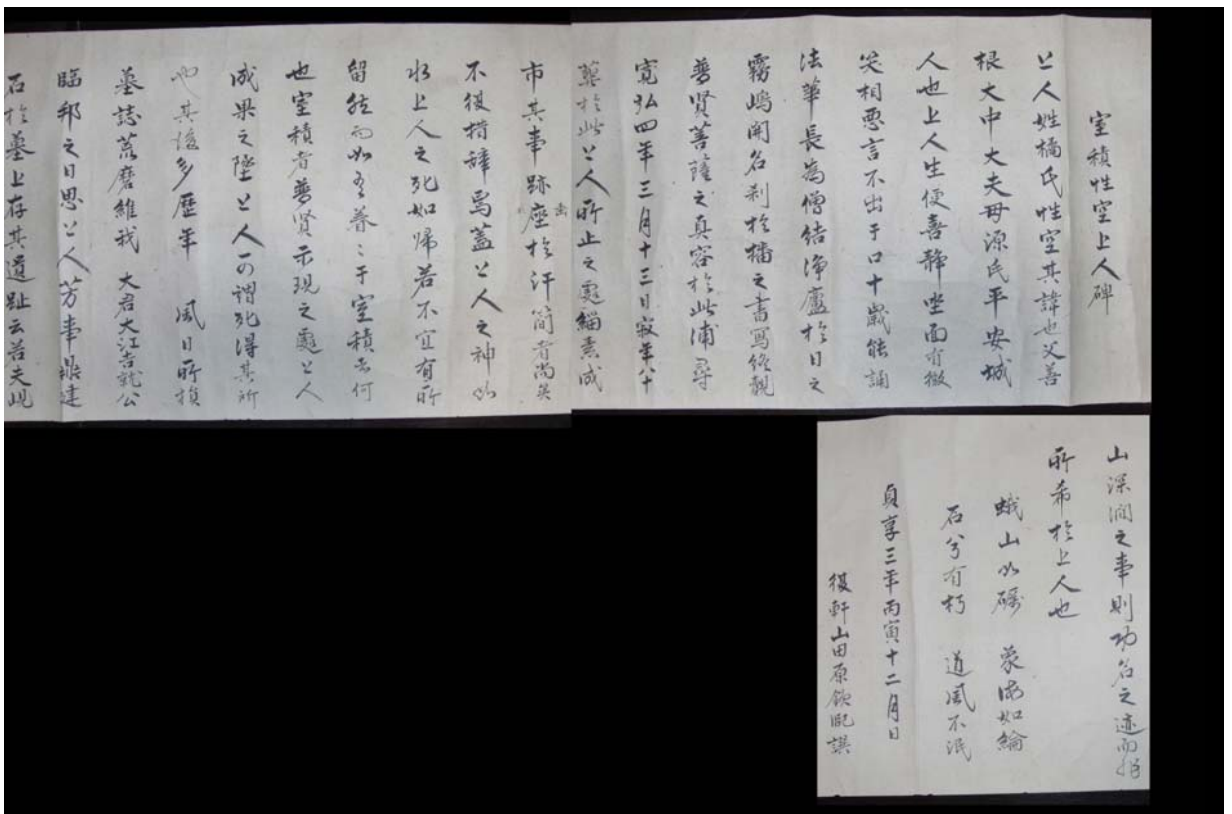
【付】

写真① 現在の性空上人碑（普賢寺にて 筆者撮影）



碑文そのものは摩耗が激しく、読み取ることが不可能である。拓本の所在を梶野省堂ご住職に確かめたが、現在の普賢寺には存在しないということであった。

写真② 山田原欽直筆 性空上人碑 画像



撮影は本校機械電気工学科の藤本浩先生、画像の合成は筆者。